



中名田っ子

小浜市立中名田小学校
平成30年5月22日
5月号

4月のPTA総会にはたくさんの方に来ていただき、ありがとうございました。児童もお家の人に授業の様子を見てもらい、とても嬉しそうでした。また、担任も学級の様子やお子様の様子について保護者の方と話ができて、平成30年度よいスタートがきれました。1年間よろしくお祈りします。

1年生4人の児童も学校生活に慣れ、4月下旬に行われた遠足では、高学年に混じって中名田地域を元気よく歩くなど頼もしい姿を見せてくれました。また、上級生は、リーダーとしてグループをまとめ有意義な遠足を行うことができました。特に、安全面では、リーダーが何度も後ろを振り返り、みんなが付いてきているか、危険なことはないかと確認しながら歩く姿に、このような場面から自然に全体を見る力や危機回避能力が身につくのだと感心しました。今後の中名田っ子の成長が楽しみです。



先日、興味深い本を読みました。それは、子どもをほめるとき、「頭がいいのね」と「よく頑張ったわね」の2つの言葉のうち、どちらが効果的か、という内容が書かれた本です。家でも子どもをほめるときに、どんなふうにほめると子どもが伸びるのかと一度は考えられたことがあるのではないのでしょうか。コロンビア大学が行った実験の結果では、「子どもの頭の良さをほめると、子どもたちは意欲を失い、成績が低下する」ということでした。つまり、「頭がいいね」と言われると、「何かを学ぶこと」ではなく、「よい成績を取ること」がゴールになってしまい、テストでよい点数がとれなかったときには、成績について嘘をついたり、「自分は才能がない」と考えたりする傾向があるのだそうです。一方、「よく頑張ったね」と「努力」をほめられた子どもたちは、次のテストでも粘り強く問題を解こうと挑戦を続け、悪い成績を取っても、それは、「(能力の問題ではなく)努力が足りないせいだ」と考え、やる気を持続させたとのことです。

アインシュタインの言葉の中に「天才とは努力する凡才のことである。」というのがあります。私たちも、子どもの努力を応援できるサポーターでありたいとこの本を読んで強く思いました。

(裏面もご覧ください)

ご意見・ご感想をお聞かせください。

..... <キリトリセン>

保護者の声 年 組 保護者氏名

二面性



先日、出張である大学教授の講演を聞いてきました。その会場には約300人が参加していました。座席が決められていて私は、会場の後方の席でした。講演を聞きながら、こんな事を思いました。「1番前の席の人は、後方に座っている私に比べ、さぞ緊張しているのだろうか。」「私の席からは、教授と目を合わすこともないな。」「質問されても指名される確率は低いな。」と。子どもの頃、座席替えで1番前の席が不人気だったことを思い出しました。1番前にいると、気が抜けず、後ろの席より集中していないといけない気がしていました。しかし、見方を変えると、1番前の席だと集中して話しに耳を傾けられるし、そうせざる得ない状況に自然に追い込んでくれる。1番目の席にすわっているだけで、もしかしたら苦手な教科も少しはできるようになっていたかもしれないなんて思いながら中名田小の子どもたちのことを考えました。中名田小学校の学級規模だと、授業中、子どもたちは、常に集中し、いい意味での緊張感を持って学習に取り組んでいるのではないだろうか。中名田小学校は、小規模で複式学級のある学校です。小規模で複式学級には多くのメリットがあることを、出張から帰ってきて、再認識しました。複式の授業において、担任が他学年の指導をしているときには、自分たちで学習を進め、課題を解決するなど「自ら学ぶ子ども」が育つ、また、このような学習を進めることで、主体的な学習者として成長できる。また、担任も、一人ひとりに寄り添った具体的な指導ができ、個性や特性に応じた教育活動を展開することができます。更に、異学年の子どもが共に学ぶことで、年下の児童が年上の児童をまねて自然に学んでいく効果が期待され、年上の児童は、お手本になろうと自分を見つめ意識しながら生活しようとするなど、心の面でも成長が期待されます。もちろん、デメリットも存在します。学級対抗がないなど、切磋琢磨する機会が少なく、競争意欲が乏しくなりやすい。また、多様な考えや価値観を持った児童との出会いに恵まれにくいと、知的刺激が少ないなどです。

物事にはメリット・デメリットがあります。小規模・複式学級のメリットを最大限に生かせるよう頑張っていかなければいけないし、それができる教職員の集団でありたいと思いました。

(文責 村上奈保子)

